

7月21日 ヨハネによる福音書6章22～27節

「最も良い食べ物」

今日の個所は、イエス様のもとに集まった人々を満腹にした「五千人の給食」の出来事を受けて群衆がイエス様のもとに集まった場面です。彼らは、イエス様が言うように、「パンを食べて満腹したから」イエス様のことを探し求めていました。イエス様の行った奇跡のご利益を期待して集まった人々が大半だったのでしょう。それは、何も彼らがただ強欲だったわけではありませんでした。彼らは5000人集まって、食べ物を差し出そうと思っても5つのパンしか差し出せなかったことから、貧しい人が多かったのです。

イエス様は、いつも社会の中の裕福な人々ではなく、貧しい人々や隅に追いやられた人々を招く方でありました。そんな貧しく何も持たない人々に対して、ありのままにいいと説きながら、あなたたちを愛しているからこそ神様が自分を遣わしたのだと、神様の愛を語り続けました。彼らに対して、今日の個所でイエス様は、「朽ちる食べ物のためではなく、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」と勧めます。貧しくいつもおなかを空かせている人にとって、「朽ちない食べ物」「永遠の命に至る食べ物」と言われれば、「もうひもじい思いをしなくてもすむ」という大きな希望の言葉だったことでしょう。

飢えは恐ろしいものです。空腹を満たすことに夢中になってしまい、他のことが頭の中から追い出されてしまいます。一度飢えてしまえばそれ以外のことが見えなくなってしまうのです。神様の事さえ忘れて、何かを追い求めてしまうことがないように、イエス様は「永遠の命に至る食べ物」として、御言葉を人々に教え続けるのでした。

このような、「食べ物」に関して、注意すべきことを使徒パウロがローマの信徒への手紙14章10～23節で説明しています。ここでは特に食べ物によって裁くことが間違いであると指摘しながら、私たちが誰かを裁き、誰かのことを判断することを避けるように勧めています。

ユダヤ人たちは、律法に従ってよいものだけを食べようと考えていました。だからこそ、律法を気にせず飲み食いする異邦人との食事を避けていました。そのように、律法に従った結果隣人への愛を失ってしまわないように、とパウロは語ります。

このように、パウロが語る食べ物に関する勧めは、食べ方の事でありながら、信仰の道に関する勧めでもありました。「信仰に基づいていないことは全て罪だ」と断言するように、私たちの行いも罪に陥ってしまわないように気を付けなければいけません。だからこそ、隣人や兄弟姉妹のために「自分がしたいことではなく、神様が望んでいることを行う」ことが求められているのです。食べることも飲むことも、すべての業が平和と喜びを実現する方法で行われるのであれば、そこに義がある、神様が喜ぶ食卓を実現することができるのです。

私たちが御言葉に養われて、神様への愛で満たされた結果、私たちは神様から受け取った愛を誰かに返すことが出来ています。献金という形で教会に対して、この世での働きにおいて隣人に対して、私たちは愛を示すことが出来ています。その相互の愛の交わりは、私たちを、そして私たちの隣人を、確かにイエス様のもとに導く「最も良い食べ物」、永遠の命に至る食べ物へと導いているのです。イエス様の言葉を糧にして、私たちは心に豊かに愛と活力をいきわたらせて、生き生きと生きることができます。その力強い支えを受けながら、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書 6 章 22～27 節

- 22:その翌日、湖の向こう岸に立っていた群衆は、小舟が一そうしかそこになかったこと、また、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気付いた。ところが、ほかの小舟が数そうティベリアスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所に近づいて来た。群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜してカファルナウムに来た。そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「先生、いつ、ここにお出でになったのですか」と言った。イエスは答えて言われた。「よくよく言うておく。あなたがたが私を捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもとどまって永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父なる神が、人の子を認証されたからである。」